



ウオッチング多摩

市民14万人全員がウォッチャーでありサポーター!

「市民の力」を多摩市の新しい魅力にしよう 猛暑日、69市民が熱い討論を繰り広げた Wの会が「新議員と市民のトークの会」

8月1日午後、晴天。真夏の太陽キラキラ、気温35°超の猛暑のさなか、パルテノン多摩4階の大会議室に69人の市民が集まった。ウオッチング多摩の会(Wの会、神津幸夫代表)が開いた「語ろう、多摩市の魅力を!新議員と市民のトーク会」の論議に参加するためだ。4月の市議選で当選した新人8人のうち7人が出席。フロアからの熱のこもった激励、期待、注文の声々、新市議とのやり取りなどを通じて多摩市の現状、市長や行政、市議会の問題点が具体的に明確に浮かび上がった。論議は最後には現代の民主主義のあり方にまで及び「市民の力を多摩市の新しい魅力に」という話に至るような展開になった。

2時間半の討論の後で「ご感想、ご意見を」のペーパーには参加者から「開催自体がすばらしい。有難う」「話し合いを続けてほしい」「あつい想いを持った方が多いと思った」「良かった。次回も参加」「市民の高い見識を持った高度な意見を聞くことができ、大変楽しかった」「とても良い企画だと思う」などの書き込みが残された。この「猛暑日」の討論会、まあ好評だったと言っていいだろう。(以下はこの日の討論の報告ですが場所によって生じたハンドマイクの不具合のために2人の市民の発言が聞き取れず、掲載できなかったことをお詫びします。Wの会・半田拓司)

「18歳」不発

この公開討論会は「Wの会」が4月の市議選前に立候補予定者を集めて開いたのに続いて、ことし2回目。今回は今国会で選挙権の年齢が「18歳以上」に引き下げられたことも考え、これまでのように市内各所にチラシを置く以外に都教委や市教委などを通じて市内の高校、中学に生徒たちの参加を要請したが、それは残念ながらうまく結ばなかった。これまでの選挙権者以外には東愛宕中3年で生徒会会長の畑澤猛君が1人、校長の呼び掛けに応じて顔を見せただけだった。



トーク会はまず正面の席に並んだ7新市議の自己紹介と6月初議会の感想から始まった。その際に司会進行の神津代表が7人にちょっと面白いボールを投げた。神津さんは6月議会を傍聴して新人は「皆さんしっかりした人たちばかりとお見受けした」と持ち上げた後で「まだ議員になってないという立場から議会に対して感じた率直な感想を」と注文を出したのだ。1市民のようなまっさらな目で議会の現状をどう見たか、それも語ってほしいということだ。

10数年、同じ質問を繰り返す議員

くじ引きで決めた発言順でトップになったのはいいじま文彦さん（無所属）、ことし46歳で多摩市で生まれ育った。地元で小学校の

PTA会長をやっている学校の建替え問題で市当局に「思いが伝わっていない」のを感じたのが立候補のきっかけになった、と言った。市議としての思いは生まれ育った多摩市で進む高齢化やニュータウン（NT）再生の問題などで「非常に危機感を深めている。何とかよりよい町につくっていききたい」。司会の変化球に対しては議場で「（質問を）聞いてなさそうだったりおやすみになっておられたり、歯がゆい思いをしたことはある。議員同士の議論をあまり感じなかったことも確か」と苦笑いを浮かべながら語った。（いいじまさんは所用で後半退席）

次は伊地智恭子さん（社民）、「多摩市に越してきて40年近い」人でことし53歳。自ら「社会的な関心が低く好きなことをやってきた」と言うが、その人にきっかけを与えたのは3.11の大震災だった。「ルーツが家族であり故郷であることに開眼した」。NTは以前は「おもちゃのような町」だったのが今では「成熟したが老朽化してさまざまな課題がある」。それを「いい年になるまで何も見てこなかった」から「自分を育ててくれた町のためににながしか役に立てないか」と考えたのが立候補につながった、と語った。初議会についての「26人（議員数）中8人（新人）というのはかなり新陳代謝が進んだ議会だと思う」という感想は神津さんの注文を意識しての発言だったのかどうか。

次の松田大輔さん（自民）はシルバー人材センターの元職員で今35歳。その経験から高齢者就業支援の問題を市議としてもテーマに取り上げた。「地域包括センターでは医療と介護に重点を置かれがちだが、高齢者の生きがい就業も大切だ」。さらには「子育て世代の呼び込みも考えていきたい。労働者人口の増加につながる」。面白かったのは「初議会の感想」。議会では「新しい問題を出してくる人（議員）」

もいるが、古い資料を見ると 10 数年同じことを言い続けている人もいるようだ。問題は既に解決しているにもかかわらず。私はそうならないように新しい問題をどんどん掴みとって活動していきたい」

「有名にして人をどんどん呼ぶ」

4 番目は岩崎みなこさん（ネット）。ことし 55 歳。子どもの人権を守るプログラム（CAP）について語った。自分の子育てには活用できなかったが、10 年ほどこのプログラムに接してきて「何か事件が起こったときに自分とは関係ないとかこの地域には無関係だと思いがちだが、実はみんなつながっている。だからどんな世代にとっても問題を自分のことに置き換える意識を持つべきだ」と考えるようになった。地域にそういう意識を根付かせたいというのが立候補につながった、と言う。議員になって驚いたことに 1 つは、挨拶のために市役所の職場に 1 歩入っただけで職員がみんな立ち上がったことだ。「そういう目線は持つまいと思った」。

次の渡辺しんじさん（公明）は多摩市に住んで 51 年という今年 52 歳。「多摩市が好きで好きで」と言った。その多摩市、渡辺さんの小さい頃は「活気にあふれ商店街も賑わいがあり公園では子どもが走り回っていた」。ところが今では「公園には誰もいない。商店街にはシャッターが下りている」のが目に付く。そういう町にもう 1 度活気を取り戻したい、という思いが立候補になった、と言う。尾根幹線の計画も動き出し整備が始まっているが「ここにぜひとも道の駅を」というのがこの人の思い。初議会ではほかに多摩市の観光力アップを訴えた。「多摩市を有名にして人をどんどん呼び人口を増やして活気のある町に作り直したい」

次は大きくま真一さん（共産）で多摩市居住

16 年目の今年 39 歳。就職のために九州から出てきて多摩市のアニメ制作会社に勤めた。その会社を 13 年目に「やめることになった」が、そうすると地域につながりがなく「独りぼっちの生活」を余儀なくされた。その後「独りぼっち」の生活に追い込まれている市民が多いことに気がつき「ほかの人にそんな経験をさせたくない」というのが市議としての決意だ。初議会では「重層的なネットワーク」を取り上げた（大きくまさんはこの後「所用ができた」と退席）。

最後が藤條たかゆきさん（維新）、今 33 歳。「自転車を活用した街づくり」を強調した。その言い分は「都市交通の中で自転車の役割はますます重要になってくる」。移動手段として安上りだし健康にもいい。「災害にも対応できる」。その上に「増え続ける医療費にも効果的」だ。「もっと市民の足として快適な走行空間のことも含めて自転車を定着させていきたい」と語った。

「朗読劇」はおかしくないか

みんな新人らしく率直な物言いが特徴だった。市民の中にはしかし、こんな見方もある。司会の神津さんの紹介したことだが、この討論会の趣旨に関連してこうヒヤカされたというのだ。「新人と言ったってどうせ会派に入って長いものに巻かれて朱に交わってアカくなるんじゃないのか。あなたのはユメだよ」。神津さんはこのヒヤカしの声に対してか、新市議たちにもう 1 球、今度はストレートを投げ込んだ。

10 年近く議会の傍聴を続けている神津さん、議会の「朗読劇」は何とかならないか、と感じてきた。一般質問では議員は質問の中身を市側に通告するが、それに対する行政の最初の回答は「紙に書かれた文章を単純に読むだけ」。つまり議場で行われているのは、質問者

も回答者もペーパーを朗読し合う「朗読劇」だ。聞いていて「何と無駄な時間か」と思い、ちょっと何か言うと「傍聴席はお静かに」とくる。

神津さんは居並ぶ新市議にこの「朗読劇」について提起し、今度は挙手を求めた。「こういうやり方は何とか改められないか、討論をもっと効果的に展開することはできないか」と問い掛けたのだ。

手を挙げて賛意を示したのはいいじまさんと伊地智さんの2人だけ。聞いている方にはやや意外の感があった。あとの4人（大くまさんは退席）は「朗読劇」に賛成なのか、「やむを得ない」のか、手を挙げ損なったか、それとも何かに遠慮したのか。

東愛宕中の生徒会長参加

この後から討論が始まった。2部に分かれ前半は「多摩市の魅力とまち創り」で後半は「まち創りの市民参画」である。

「多摩市の魅力」の議論に入る前に神津さんが東愛宕中学の生徒会長畑澤猛君を会場に紹介した。同中学の校長がこの討論会の趣旨を話したところ手を挙げて出席の意思を示した中3だ。こういう会場で大人がどういうわけか避けたがるフロア最前列の真ん中に着席した。なかなか中学生らしい。

この後の論議の口火の意味も込めてか、神津さんは畑澤君に多摩市を「こんな町にしてほしい」という希望を語ってもらいたいと求めた。畑澤君は「高齢者と中学生の交流の機会を増やしてほしい」というのが希望だった。例えばどんと焼きにボランティア参加をしたことがあるが、そのときに一緒になった地域の高齢者にどうカマを使うか、どうカヤを結んで持っていくか、などについて「知識をもらった。そういう機会をぜひ増やしてほしい」

「永山は世界一の町です」

「多摩市の魅力」についてはまず「公園」が論議の対象になった。きっかけは最初に手を挙げた永山からの参加者の「びっくりしたのは多摩市に公園がいっぱいあること」という発言とその後に続いた公園論だ。この人は永山に住んで9年目。北海道から九州まで「すべての都市に住み、働いてきたが永山は世界一素晴らしい町です。ホントですよ」。聞いている方は一瞬キョトンとしたが、すぐに拍手はわいた。「緑も多く空気もうまい。ライフラインはそろっている。銀行も病院も名店街もある。こんな町は世界にもない」と明快な声で話し、そして公園論を展開した。

この永山の市民によると多摩市には公園が205ある。総合公園1、大3、中25（205という数はあとで渡辺さんが「206か207になった」と修正）。これらの中にキッズ公園、介護公園など高齢化社会にも適合する「憩いの場」を作ろうというのがこの人のアイディアだった。また東京五輪に向けてこれらの公園を外国勢に貸すのはどうか（もちろん有料）。さらには永山南公園に雨が降っても風が吹いても活動できる大きな建物を作ってほしいと希望を語った。



自由に遊べる公園がない

これに対して落合からの参加者が「多摩市

には子どもたちが無条件で遊べる公園がない」と問題を出した。「あれはダメこれはダメというのばかりで子どもの感性を育てるのに邪魔になる。人間は自然があつてはじめて生かされるのではないか」。この人は「楽農クラブ」のメンバー。その実践経験に基づいて「微生物の育てた土地の野菜は美味しい」と強調した。そして「多摩 NT という素晴らしい町はできたが、自然がなくなり子どもたちが育つ環境がなくなった」と町づくりの基本部分に触れる意見を述べ、隣の町田市が「何をやってもいい公園」を作ったことも紹介した。

その公園について、公明党の渡辺さんが畑澤君に「中学生は公園をよく使っていますか」と訊ねた。畑澤君の答えは「僕自身は公園より総合体育館にいつてしまう方です。周りの中学生を見ても公園に行くのは少ないと思う。ファーストフードの店でおしゃべりする方が多いと思う」。

渡辺さんはこれを受けて「公園利用は少なくなっている。1日中誰も来ない公園もあるくらいだ」と別の角度から問題を出し「そういう公園をもっと活用出来ないか」という考えを述べた。「周りから見渡せる公園はいいが法面の下だったり北側の公園」だと変質者のことなどが心配になる。「そういう公園を利用して例えば農園や菜園を作り、土いじりを通じたコミュニケーションの場が作れないか」

「多摩市は田舎」を売りものに

こういう論議の流れを見て神津さんがテーマを公園から「子育て、人育て→教育」へと展開させた。「多摩市は子育てにはいい町」という評判もあるから「今あるインフラ、市の宝を使ってさらに素晴らしい町にならないか」という狙いだったろう。

これに応じて永山からの女性が立ち「子どもを育てやすいのは確かに多摩市の魅力です」

と語った。特に NT 地区の歩車分離。この人は3人の子を育てたが「犬と同じで放しておいた。それができる町」だった。ところがこの歩車分離が「見直される傾向にある」とこの人は言った。「でも若い人を呼び込むんだったら見直さず、むしろ売りものにした方がいいと思う」。議論になった公園についても「使われていないから何かを作ろうという発想ではなく空間のままの方がいいんじゃないか」

「多摩市は田舎だ、というのを売りものにしてほしい」というのがこの人の基本的な考え方のようで「今の多摩市で道の駅を作ってもゼツタイにツブれる」と言った。もっと長期的に考えて「ハコものを作って一見盛大に見える町よりも、例えば空が広々として鳥の声が聞こえるというのを売りものにすべきではないか。そうなれば今はほかにいる私の子どもも帰ってくると思う。多摩市が大好きだから。この町をコンクリートで埋めないで下さい」とアピールして拍手を浴びた。

減速経済の時代なのに

この女性は次に西永山中学跡地の問題を取り上げて行政批判の調子を強めた。この跡地は複合施設として使われてきた。市は「福祉の拠点だ、と言ってきたにもかかわらず、去年12月に急に諏訪の都営団地を建て替えるためのタネ地にすると提案してきた。びっくりして調べてみるとまちづくりが絡んでいる」ことが分かった、と言う。「諏訪団地の建替えの機会に尾根幹線に道の駅以外にもスポーツセンターだかショッピングセンターだかを作る構想を市は持っているようだ。でも、今そんな購買力がありますか。これからは減速経済の時代なのに右肩上がりの時代のようなことを思い描いているんじゃないか」とこの女性は声を高くした。

続いて立ったのは永山に住んで28年という

女性だった。入居した頃は「小さいエリアの中で生活が完結できたから子ども同士で公園にも図書館にも行かせられ何も心配しなかった。それがこの町の魅力だった。ところが市はそれをやめて、郵便局とか病院とか住民が生活していく上での基本的な機能を多摩センター駅や永山駅、聖蹟桜ヶ丘駅の周辺に集めてしまわないでほしい。そうすると子どもを放っておくわけにはいかないでしょう。建物が立派になればなるほど人の目がなくなる。もともとの多摩市のコンセプトを崩さないでほしい」と訴えた。この人は「公共施設はなくさないでほしい」と話を結んだ。この発言にも拍手がわいた。



行政対応のチグハグさ

次に立ったのは唐木田からの人。この人は付近にある鶴牧西公園に関連して行政の対応のチグハグさについて3つ話した。1つは公園で去年7月からラジオ体操をやっているが、その前にある「みどりの家」は稼働率が低いと言われている。しかし「それはこの家の扉がいつも閉まっているからじゃないか」とこの人は思う。「無料開放すると備品に傷がつくなどの恐れはあるんだろうが、開けておけば雨の日でも体操はできるし暑い日にはそこで休める。原則的には開けておく方向で検討してほしい」。もう1つは体操の会場の目の前に

運動遊具が置いてあるが高齢者にはとても使えない。「もっと簡単な遊具を置いたらどうか」と高齢支援課に要望すると「担当は公園緑地課だ」と言われたという。典型的なタテワリ行政。「役所の部や課がもっと相互に連携してよりよいものを、と市に要望した」。もう1つ。市は西公園の近くにある2枚の田んぼで国から助成金を受けて水田を1枚作りその周りに幅2mほどのアスファルトの道を作った。休憩所も作り、その下にある川井家の桜を「車いすの方や足の不自由な方がゆったりと見られるようにした。それはもちろんいいのだが、桜のシーズン以外のあとの10、11ヶ月はアスファルトという露骨な人工物が目に付き違和感をもたざるを得ない」。

ここまでの前半の議論の展開は、どうやら神津さんの思惑とはややズレた形になったようだ。「多摩市のいいところ」を論じることで「市民の側からのまちづくり」へ、と想定したようには議論は展開していかなかったのだ。「公園」でも「子育て・教育」でも発言者は確かに「多摩市の魅力」について語った。しかしその魅力を語れば語るほど論理が行政批判に行き着いてしまうというのは、現実がそういう姿をしているからだったろう。

改革意識なくなったか、市議会

後半のテーマは「まち創りの市民参画」。会場には多摩市の自治基本条例と市議会基本条例が配られていた。神津さんはこの2つの条例とも「基軸には市民参画がある」と強調した。論議は神津さんの「条例では市民が主役と言っているのだが、それが果たして機能しているのだろうか」という問い掛けから始まった。

最初に手を挙げたのは一ノ宮からの参加者で、議会基本条例に関連させて市議会の問題

点を指摘しつつ新人議員への期待を語った。

まず基本条例について。この4月東京23区26市の地方議会改革のランク付けで多摩市議会は3位になった（1位町田市、2位東村山市）ことがあるが、それは多摩市議会では「基本条例の制定が早かった」のが大きなポイントになったからだ、とこの人は言った。ところが議会は「基本条例制定以降、改革意識が議員の中になくなってきているのを感じる」。先の市議選の公約で議会改革を主張した候補者は1人もいなかったこともそれを示している。「救われたのは要求型提案ではなく政策立案をするべきだ、とか市民との協働を推進するべきだ、という議員が3、4人いたことだ。こういう議員がいる限り可能性がある。議員の仕事が改革だけではないのはもちろんだが、議会改革の意識だけは忘れないでほしい」

市民が自身、議員が黄身

次に、この討論会に新市議が「勢揃いして参加してきたのは画期的なこと」と評価して「市民と話をしようとの意志が強い点に着目した。4年間、その姿勢を貫いてほしい」と要望した。この一ノ宮の市民は市民と議員の関係を卵に見立て自身が市民で黄身が議員だとした。「議員は市民の真ん中にいるんだという意識を持ち続け、支援者だけではなく数多くの市民と接し政策を立案して行政と対峙してほしい。それができれば東京都の地方議会の中で改革No1になれる」と、新市議への期待と要望を続けた。

もう1つ。この人の議会活動への不満は政策立案と市民との意見交換会、議会報告会についてだった。特に報告会。基本条例の規定では「年1回以上」で4月と10月にやっているが、議会の会期は年4回だから4回やってもいいんじゃないか、と言った。特におかしかったのは去年11月の報告会で「あれは何で

すか」と声を荒げた。この報告会は「特定の団体のところでやった。報告会は市民全体に対してやるべきなのに、おかしい。非民主的だしきわめて残念だ」と声を高め、新市議に対して「4年間、おかしいことがいろいろと出てくるだろうが、それに対して立ち向かってほしい。大いに期待しています」。ラストを前向きな言い方で結んで拍手を浴びた。

TPP=多摩市、ピンチピンチ

次に稲城市民が立ってNT再生の問題に絡めて新市議への激励発言をした。

「多摩市はNTのハシリだ。地元よりほかから来た人が大いに議論してまちづくりをした。その議論は今につながっていると思う。スタート4、50年、少子高齢化で年寄りが増えていく中でNTの問題点が明らかになってきたが、かつてまちづくりの中心だった年代は高齢化で退き、若い人の声はまだそれに代わってきていないというのが今の問題ではないか」。こういう状況の中で新市議が集まって市民と議論するというこの会の趣旨をこの稲城市民は「素晴らしい」と評価した。「こういう議論がNTスタートのときのパワーだったんじゃないか。おそらく全国のNTが多摩市のやり方をみていると思う」

次は豊ヶ丘からの参加者。「議員への期待を込めて」と話し出したが、中身は市政にも市議会にも耳の痛い話ばかりだった。まず、この日までハワイで行われていたTPP交渉に引っかけ、これが農業者にとっては「田んぼ、ピンチピンチ」だとすれば、多摩市も同様にTPPで「多摩市、ピンチピンチ」ではないか、という話から始まった。ややユーモラスな調子でスタートした話はしかし、行政にも議会にも厳しい指摘が続いた。その大要は以下のようだ。

「少子高齢化は人口や税収の問題も含めて

確かに大きな問題だが、実際に行政に携わってきた者としては分かり切ったこと、それに行政がどう対応してきたかが問われなくてはならないはずだ。大変だ大変だというのは行政的には無能力だということ。今言う問題ではない」

一方的な行政、役割果たさぬ議会

「NT の原型は居住を支えるインフラをきちんと整備してきたことにある。それが地域で安心して子どもたちを育ててきた多摩市の原点でもあり最大の長所だった。ところが人口減少が続く中で過疎地の限界集落では子どもたちの施設がなくなり生活を支える社会的基盤が政策的な対応がないままどんどんなくなっていく。多摩市では学校や公共施設のような地域のコミュニティ施設を先行的になくしていくプログラムが平気で立案され実行されようとしている。これに対して議会は、この行政的に大きな問題のある政策に、根本的に機能を果たさず、役割を果たしてこなかった。議会報告会を青少協に対してやったこともそうだ。地域の市民のために政策活動するという原点に立たないような議会報告会のやり方がある得ますか。こんなことでは民意を反映した議員活動ができるわけではない。通告に基づく議会の一般質問も市民生活の利害からきわめてかけ離れている。議員活動とは本来、市民要求を翻訳して政策にしていくことではないか（拍手）。そういう議会活動、行政追及をちゃんとやってほしい」

2 基本条例は形骸化

「自治基本条例も議会基本条例も今はまったく形骸化している。市民との関係性において政策協議をやっているか。やっていない。阿部市長は地域委員会構想など制度的提案を持っていたようだが、すでに事実上放棄して

いる。市民の声を反映した市政とはいかにあるべきか、そのための具体的な手続きを制度的にもやらないといけない。市政は自分たちだけの判断で一方的に地域の公共施設をなくそうとする計画を作って出している。それを市民参加でやっているかのようなやり方は許しがたい。その点の是正が新市議のみなさんには期待されている。悪しき文化と慣習に染まらず市民としっかりと向き合っていてほしい」

この TPP(多摩市ピンチピンチ)の状況説明と主張は明快な論理とよく通る声で語られ、会場の大きな拍手を呼んでいた。

次いで永山から来た人が立った。市議会を何回か傍聴経験のある人で、その経験に立って議会論議に具体的な提言を行った。その提言を通じて論は民主主義の現代的なあり方にまで及んだ。

議員同士は話しているのか

最初に議会論議について。「例えば一般質問中、議場では誰も1言もしゃべらない、最近はやじもとばない。こういうやり方がずっと続いてきているが、これは民主的と言えるか」とまず提起した。それなのに、この討論会の初めの「初議会の感想」ではこのことに誰も触れなかった。「みんな満足しているのか。とすれば今までと同じだ。みんなそのうちに色に染まっていくのではないかとやや挑発気味に出席市議に問い掛けた。「一般質問のときでも疑問があったら発言できるようなチャンスを与えろ、ということをやってみないか」

例えば6月議会では自転車の問題を取り上げた議員が3人いた。同じような趣旨の質問だったが「この3人が事前に話し合ったか、どうもそうは思えない」。会派の中で「そういう議論をやっているかと言えば、やってない

んじゃないか。そういう話し合いもせずに議場に出てきて市民の代表です、という顔をして30分喋るのはちょっとヤバくないか」

議論尽くして第3の道を

次に委員会。委員会論議について新市議は1言も話さなかったが、ここでも結論は多数決で決めている。「何十人だったらやむを得ないかもしれないが、委員会はせいぜい6、7人で話をするのに多数決とは一体何をやっているのか。6、7人だったら徹底的に話をし妥協的な第3の道を作ることのできなくて何が市民の代表か」。新市議については「古い議員のやり方をそのまま踏襲していれば4年間の議員生活はできるんだと安易なことを考えているようではしょうがない。これがおかしいと思ったら新しいものを作って下さい。創造して下さい。でなかったら何のための新議員なのか、ということになる」。

話はここから現代の民主主義論に及んでいった。「議会制民主主義が今批判の矢面に立たされている。これでいいのか、という矢がどんどん飛んできている。新しい民主主義のあり方、新しい議会や選挙のあり方、それを作り上げていく責任がわれわれにはあるのだ。この制度は18世紀の初めに作られたから今の時代に通用するはずがない。どうやればいいのか、それが市民参加だと思う」

新しい民主主義は・・・

その市民参加の具体的な場としてこの人は「地域委員会」を取り上げた。「阿部さん（市長）の言ったことだが、いまだに何もやってない。本当に市民の委員会を作って問題を自由に討論させて妥協点を探して第3の道を作る。そういう地域委員会を作れるか作れないかが、新しい民主主義が作れるかどうかの分かれ道になる」と、この永山の市民は強調、ここでも拍手がわいた。

ここで語られたような、議会の慣習的な意思決定の手法について、若い世代はどうなのか。神津さんがまた畑澤生徒会長に話を振った。畑澤君はやや話しづらそうに「僕自身は自分の意見は通そうとする方ですけど、自分の意見を持っている人は少ないと思う。仲間うちで賛成しようよ、みたいなことになってしまうことが多い」と生徒会やクラス討論の実態を話した。

フロアで最後に手を挙げた人が、この時間まで残って議論に参加した市議5人に一般質問で得られた市側の回答に対しての満足度を「1言で答えて」と聞いた。「20%」（伊地智）「あまり満足できない」（松田）「却下されたに等しい」（岩崎）「軽く流されてしまったかな」（渡辺）「2割くらいかな」（藤條）という答えが出てきた。この人は「そういうことも含めて市民には伝わっていない。是非とも報告会をやって話してほしい」と求めた。

「厳しい意見を糧にして」

最後に、途中で退席した2市議以外の5人が2時間半に及ぶ討論の感想を、これまた1言ずつ話した。

藤條さん「議員同士の議論の場がないというのは自分も感じていた。これでは議会の機能は果たせていないのではないか」

渡辺さん「厳しい意見をいろいろと聞かせてもらい、これを自分の糧として勉強しながらやっていきたい」

岩崎さん「公共施設の値上げは受益者負担ということだが、行政の要望では維持費は数%に満たない。それだけではなく公共施設の統合問題がこれから起こってくる。そこは何とか踏ん張りたいと思っている」

松田さん「勉強不足を痛感した。高齢者関係の仕事をしていたにもかかわらず分からな

いことがまだたくさんあると思った」

伊地智さん「とてもよかった。まだ“垣根ある感”があったのが心残りだが、こういう会をつなげていけば太い方向性が生まれるのではないか。アグレッシブな数々の意見を聞いたが、こういう力があればそうなるっていく。みなさんと一緒に多摩市の中で成長していきたい」

司会進行の神津さんがこの2時間半の議論をまとめた形で、前半のテーマ「多摩市の魅力」に関連させてこのような言い方をした。

「多摩市には公園も多い。緑も豊かだ。子育てもしやすい。そういう魅力に加えて多摩市は市民の意見が政策に反映している町だ、市民の力のある町だ、というのを多摩市の新しい魅力にできないだろうか」

行政案に対置できる選択肢を

神津さんはそれまでの「まとめ」でこう言っていた。「議員は市民が選ぶ。活動を見守り成長させるにも市民の力が大きいはずだ。自分たちの意見・議論を議員に伝え議員がそれに基づいて議場でやり取りするという積み重ね

が、議会を育て民主主義を成熟させていくんじゃないか。そういう形で議員が行政案に対置しうる選択肢を作ることができないか。今の多摩市民の不幸は行政の選択肢が1つしかないことだ。例えば公共施設を縮小する、それだけで押し切ろうとする。金の足りない時代を市民が自分たちの力でどう乗り越えていくか、そういう力を育むことが大事なんじゃないか」

この日の議論のポイントはどうやら、2期目の市長が今や知らん顔をしている地域委員会と議会がサボっている議会報告会を、まずどうにかしていくことにあったのではないか。前のは制度に関わり後のはやり方の問題だ。それを何とかすることで、この日の2テーマに即して言う「市民の力」を市民参画によって大いにアップさせ、多摩市の新しい魅力にしていこう、ということだ。何とか頑張ってみませんか。（了）

入 会 申 込 書	■会費・カンパ振込先■ みずほ銀行多摩センター支店 1197246 「多摩市議会ウォッチングの会」 ■申し込み■ 「ウォッチング多摩」の会 代表 神津幸夫 〒206-0034 多摩市鶴牧 3-14-2-102 042-372-9496 HP: http://watching-tama.com/
氏名	
住所	
電話・FAX	
メールアドレス	

★入会金は必要ありませんが、会報発行等の活動維持のために年会費 2000 円を頂いております。